

武田神社についての研究

— 伊東忠太と大江新太郎を中心として —

Keywords

武田神社 明治維新 伊東忠太
大江新太郎 官国弊社制限図

1. はじめに

1.1 研究背景・目的

明治以降、日本は世界に向けて自国のアイデンティティを創出する必要性が生じ、その拠り所の一つに神道が求められた。神社らしさとは何かが追求され、神仏分離令や官国弊社制限図を作成するなど、日本の神社建築の在り方や思想は明治を境に大きく変わったといえる。本研究では、山梨県の依頼で調査を行った、伊東忠太と大江新太郎設計で大正8年(1919年)に創建の武田神社が、明治時代の思想や制限図によってどのような影響を受けたのか、また、伊東忠太や大江新太郎の神社作品を分析・調査し、設計手法の流れをつかむことによって、武田神社の神社建築史としての位置づけを明確にする。

1.2 研究方法

- (1) 武田神社の実測調査を行う。
- (2) 全国の神社建築や制限図との比較・分析を行う。
- (3) 伊東忠太と大江新太郎の神社建築に対する思想を調査・分析する。
- (4) (1)(2)(3)より、武田神社の神社建築史としての位置づけを明確にする。

2. 調査

2.1 実測調査

2013年8月8日 武田神社

本殿・拝殿・祝詞舎・神庫・神輿庫・中門・北門



写真1 本殿



写真2 拝殿



写真3 神庫

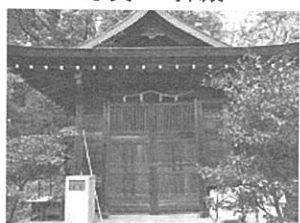


写真4 神輿庫

2.2 敷地

実測調査を行った山梨県甲府市にある武田神社の配置図を図1に示す。武田神社は信虎・信玄・勝頼の三代が60年余りにわたって居住し、昭和13年には国の史跡として指定された躰躰ヶ崎館の跡地に建てられた。

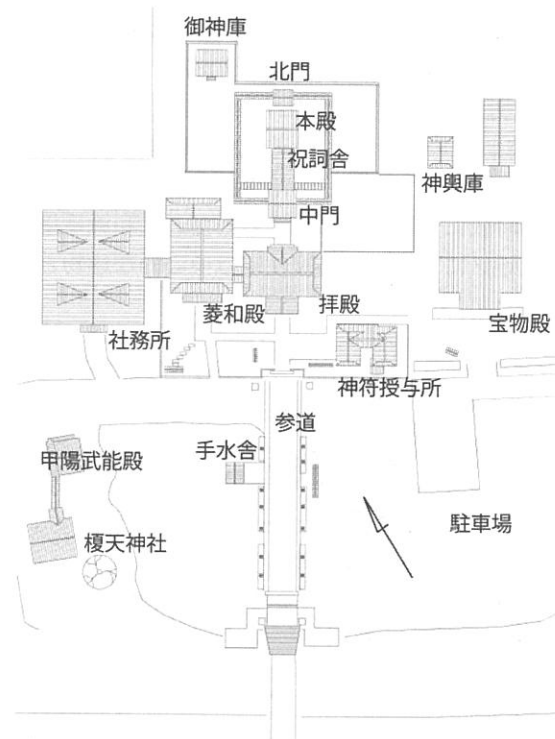


図1 武田神社配置図

3. 武田神社について

3.1 概要

大正4年(1915年)、治水や税法の改正を通じて産業の振興などに功績があったとして、大正天皇が武田信玄に従三位を与え、また日清戦争や日露戦争で日本が勝利し戦国武将である武田信玄への注目が集まったこともあり、武田神社創建の機運が高まった。そして大正8年(1919年)には社殿が竣工し、県社に列せられることとなった。設計者は建築家の伊東忠太(工事顧問設計監督)と大江新太郎(工事顧問)で、主祭神は武田信玄である。

3.2 本殿

- ・梁間二間 桁行一間 ・一間社流造 ・檜皮葺
- ・身舎は丸柱 ・板唐戸 ・回り縁には脇障子



K10003 蒔 賢治

3.3 実測図面 本殿・神庫・神輿庫・拝殿

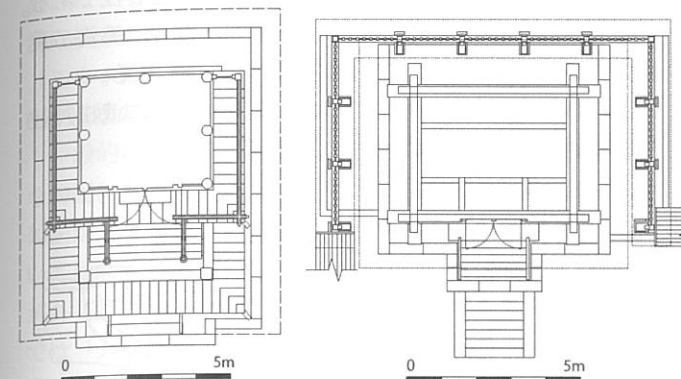


図2 武田神社本殿、神庫 平面図

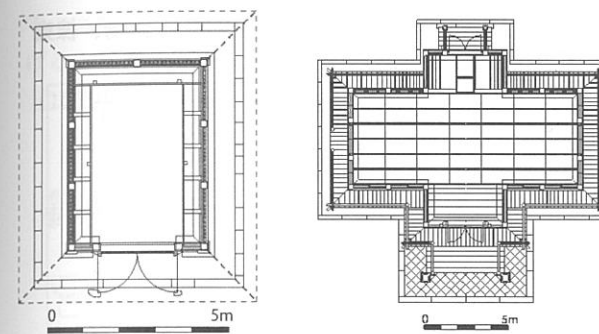


図3 武田神社神輿庫、拝殿 平面図

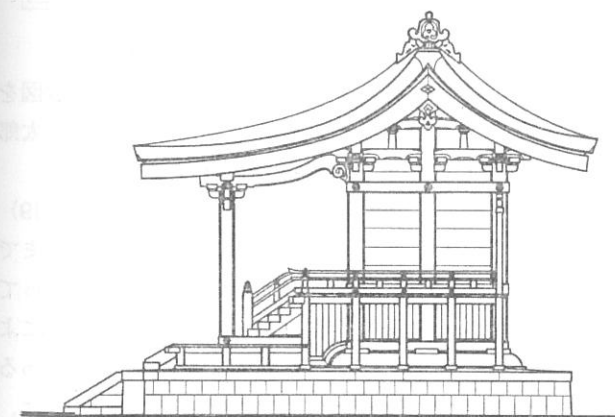


図4 武田神社 本殿 側面図

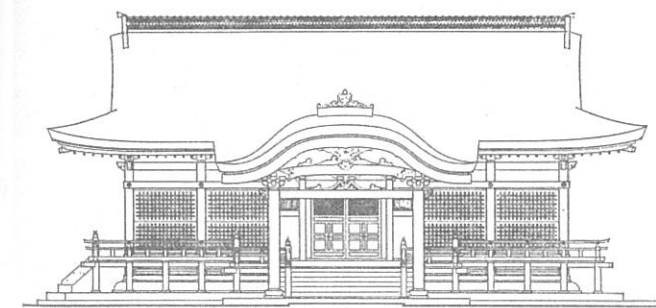


図5 武田神社 拝殿 立面図

4. 制限図について

明治6年に制定された設計規格を「神社制限図」という。神仏分離により境内の建物が少なくなった神社の境内整備のための指針を示すと共に、装飾性を抑え経費を削減する目的があったとされる。創建神社は制限図を適用されることが多く、武田神社もそのうちの一つである。武田神社での適用のされ方を後の項で分析、考察する。

5. 二人の建築家

5.1 伊東忠太

慶応3年(1867)に米沢にて生まれる。明治から昭和期の建築家であり、建築史家である。「建築進化論」を唱え築地本願寺や震災記念堂などの作品を残すとともに平安神宮や明治神宮など多くの神社建築設計に関わる。

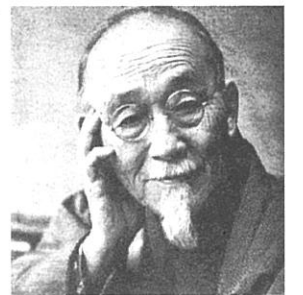


写真5 伊東忠太

5.2 伊東忠太の神社建築観

伊東は制限図により画一化された神社建築を批判し、神社らしければ意匠は建築家の自由でよいとし、今後は石や煉瓦造の神社が現れるべきであるという「建築進化論」を主張した。そして神社建築は新様式を希求すべきである、とした。伊東は宮崎神宮(1907年、明治40年竣工)で制限図に規制されない独創的な意匠による社殿を完成させていた。

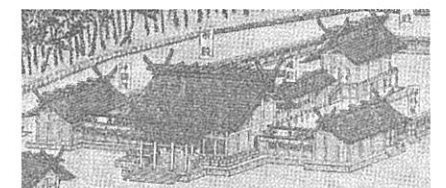


写真6 宮崎神宮 社殿

明治天皇を祀る明治神宮(1920年竣工、大正9年)では、技術者の最高責任者として不燃による新様式の主張を携えて参画したが、大正3年には新様式を撤回し木造の様式で流造を主張した。そして制限図に近い配置計画を採用することとなる。伊東は神社建築に新様式は必要もなく様式が変化することもない、と主張し、神社木造論者として、神社の古式遵守主義者となる。



写真7 明治神宮 社殿

5.3 大江新太郎

明治9年(1876)京都にて生まれる。大正から昭和期の建築家である。明治神宮宝物館、神田神社などを設計した。

5.4 大江新太郎の神社建築観

大江は、在来の様式を尊重し継承していくと同時に、現代社会の要求に合わせて変えていこうとする姿勢を持っていたと考えられる。

それは大江の設計した神社建築からも読み取ることができる。明治神宮で鉄筋コンクリート造の不燃による宝物殿を設計しているが、大江の考えを最もよく示す作品として神田神社(1934年再建、昭和9年)を挙げる。



写真8 大江新太郎



写真9 神田神社 社殿

関東大震災を体験した大江は、不燃化の神社を主張した。神田神社は権現造で、鉄骨鉄筋コンクリート造である。近代の技術の耐火構造であるが木造の木割に近づけるなど、在来の神社形式(権現造)に近づける工夫がされている。

6. 武田神社分析

建築家の伊東忠太と大江新太郎設計である武田神社本殿では、一見すると伝統的な一間社流造に見えるが、明治期以前のような伝統的な神社建築とは異なる点が細部意匠においていくつか存在する。

6.1 柱と組物

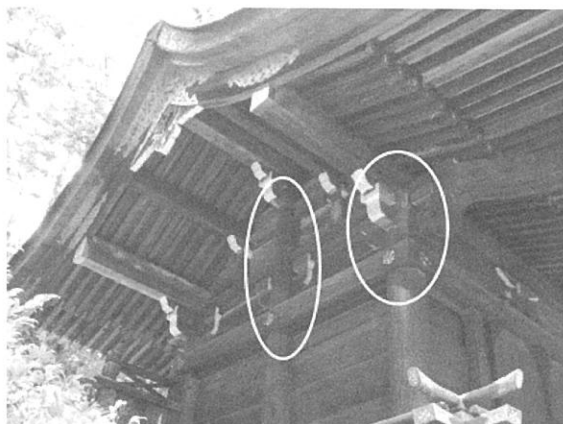


写真10 武田神社本殿 妻側

まず、写真10中央に見られる柱は、流造において棟木まで伸びてくることは少ないはずであり、通し柱である。

次に右に見える身舎柱に関しては、その上に組物が乗るはずが直接桁を受け、組物は挿肘木としている。

これら武田神社の細部意匠には前例がない。武田神社と一般的な神社の差異を図6、図7に示す。

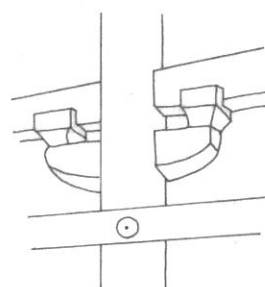


図6 武田神社の組物、柱

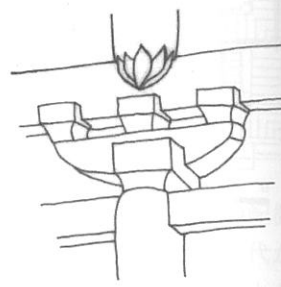


図7 一般的な組物、棟束

6.2 制限図の影響

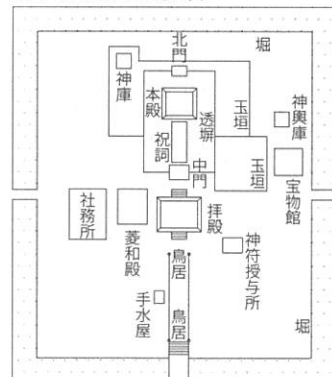


図8 武田神社 境内配置

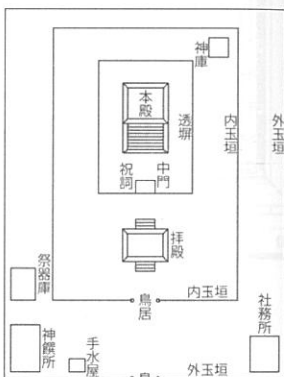


図9 制限図

1916年(大正5年)に山梨県技師加護谷祐太郎が配置図を作成しており、その後に彼の県外異動により大江新太郎と伊東忠太に担当が交代し社殿設計が行われた。

武田神社の配置(図8)を見てみると、制限図(図9)を適用されていることがよくわかる。拝殿から本殿まで直線的に中門・祝詞と配置され、それらを透塀によって囲んでいる。さらにその外側を神庫を含む形で玉垣により囲っている。そして拝殿に至るまでに鳥居が二つあるのも共通点である。外玉垣が武田神社には無いのは、元々あった堀がその役割を持っているからであろう。

6.3 配置計画

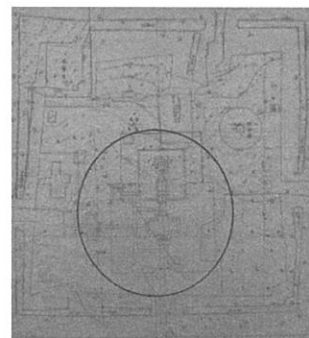


写真11 変更前の配置図



写真12 変更後の配置図

写真11は加護谷技師が描いた配置案であるが、伊東と大江による写真12の方が社殿の位置が上に来ている。これは伊東の意見により変更されたことが武田神社所蔵の「工事ニ関スル書類」に書かれている。

6.4 屋根勾配

一般的な流造の屋根勾配よりも武田神社は特に緩やかな勾配になっている。江戸時代に建立の神社などは屋根勾配が急であるのが多く見受けられるが、武田神社においてはおそらく古代の頃の神社に近づけようとする意図があったと思われる。それは明治神宮でも見られ、本殿では「大体の調子は平安時代の最優美なる形式を取る方針」のもと柱の大きさ、軒の反り、屋根勾配などが設計されており、緩い屋根勾配になっている。

図10は武田神社の屋根、図11は一般的な流造の例として、三船神社(1590年建立 和歌山県重要文化財)を挙げる。また、古例には最古の流造と言われる神谷神社(1219年建立 香川県国宝)を挙げる。

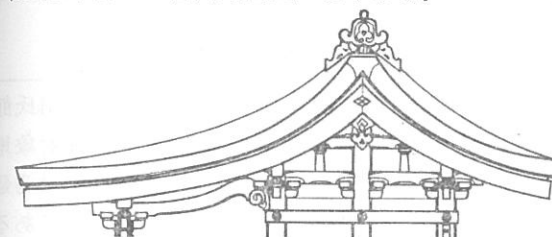


図10 武田神社

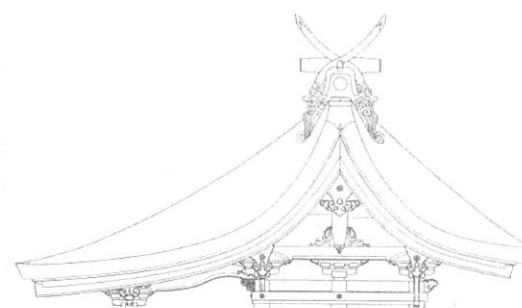


図11 三船神社(一般例)

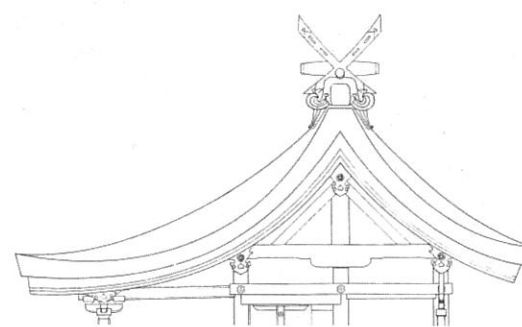


図12 神谷神社(古例)

7. 分析の考察

伊東と大江の神社建築観に大きな影響を与えたのは明治神宮であった。伊東は古式遵守の立場へ、大江は宝物殿の経験から合理主義者へと思想が変わっていったと思われる。これら二人の神社建築観などを参考に考察する。

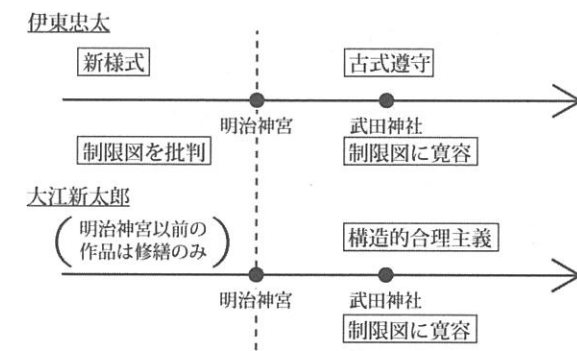


図13 伊東と大江の思想変遷

7.1 柱と組物の考察

前例の無い細部意匠であり、神社建築界を代表する二人がこれらを知らずに設計したとは考えにくく、意図的に用いたと思われる。通し柱にすることで構造的に強くし、それに伴って挿肘木にしたと考えられる。

伊東の神社建築観からは彼の設計とは考えにくく、構造的合理主義者である大江によるものと考えられる。

7.2 制限図の考察

武田神社の設計は加護谷技師が大正5年7月から9月まで担当しており、配置計画は彼によるものである。前述の通りそれは制限図を参考にしていた。その後設計を引き継いだ伊東と大江は、既に明治神宮において制限図に近い配置案を採用しており、加護谷技師の制限図を用いた配置案を抵抗なくそのまま用いたと思われる。

7.3 配置計画の考察

伊東は、加護谷技師の配置案の社殿が入口(南側)に大分近いので、社殿を北へ移動し、参道を長くすることで神聖度を高めようとしたと思われる。

7.4 屋根勾配の考察

武田神社の緩い屋根勾配は古代に近づけようとする意図があり、復古的な要素があったと思われる。在来の伝統的な構造とは異質な柱と組物を用いながらも、外観を古代に近づけようとしたと考えられる。

8. まとめ

武田神社は神社建築界を代表する伊東と大江が手掛け、古代の様相を再現しつつも、構造的合理性による新しい試みを行った神社である。また、明治・大正期のナショナリティの高まりの中で建てられ、制限図の影響を受けている。伊東と大江両氏の神社建築思想の過渡期に位置すると共に、ナショナリティの高揚という社会情勢を反映した大正期創建神社の代表的存在であるといえる。

参考文献

- 1) 「武田神社誌」 武田神社 1989年
- 2) 「近代の神社景観」 1998年 中央公論美術出版
- 3) 「大江新太郎の神社建築観」 藤岡洋保 1992年 日本建築学会大会学術講演梗概集
- 4) 「日本の建築と思想—伊東忠太小論」 丸山茂 1996年 同文書院
- 5) 「工事ニ関スル書類」 武田神社奉建会 1917年 武田神社所蔵